

〔書評〕

長谷川成一編『北の城下町 弘前』

一九八九年弘前シンポジウム報告集』

佐藤 一 義

一

私事でたいへん恐縮だが、筆者には学生時代から教員となった現在まで続いている一つの疑問がある。それは、「日本史学は実学たり得るか」という疑問である。不勉強な者の言い訳なのかも知れないが、自分の学んだこと、仕事とすることがはたしてどれだけ社会に役立っているのかと時々迷うことがある。日本史研究者や教育者の活動は、社会に何かを還元できるのか。時には社会を動かす原動力となることはできないものかと思うのである。

そのような筆者に解決の糸口を与えてくれたのが、本書『北の城下町 弘前』である。本書は、その副題にもある通り、一九八九年九月二十三日から二十五日にかけて開催された弘前シンポジウムの報告集である。同シンポジウムは、『弘前シンポジウム 北の城下町弘前——過去・現在・未来——』という大会テーマの下、日本の北方地域に所在する弘前市の特質を見極め、二世紀目に入る同市の新たな都市像を創造する目的で、市制百周年記念事業の一環として行われた。初日の基調講演に続き、

二日目には四つの研究報告と質疑・討論、そして最終日に市内各所の巡見を行い、予想を上回る盛会であった。

筆者は急用のため参加できず、たいへん残念な思いをしたが、本書の刊行によりその思いも解消することができた。まさに当日の熱気が伝わってくる内容なのである。その構成は、経過報告と問題提起、講演・報告の要旨に続き、基調講演・研究報告、そして質疑・討論、参加記となっている。以下、本稿ではその内容の紹介と若干の感想を述べ、最後に今回のシンポジウム全体の総括を試みたいと思う。

二

基調講演『建築から見た北の城下町』弘前』

——過去・現在・未来——』

講演者は千葉大学助教授玉井哲雄氏。玉井氏は、建築史の視点から城下町を構成する建築、特に町家の調査から弘前の特質や建築と人々との関わり方に迫った。それは、同じ建築物でも城郭や武家屋敷より、町家の方が地方色・特殊性が明確に出るという理由からであり、二十棟の町

家調査の結果、次の点が明らかにされた。

①建築の間取りは、全国と同様に通り土間一列型が基本で二列型もあること。江戸では底下の地権争いで消滅した「こみせ」が弘前には残っていること。

②外観は、古い時代「妻入」が多く、雪処理に適した「平入」はごく近代になってからであること。

③構造技術では、東北の日本海側から北陸にかけての寸法体系に合致する柱間六尺三寸であること。

これらの点から玉井氏は、建築から見た弘前の特色として、間取りや柱間など他地域と類似した点もあるが、「妻入」「こみせ」など雪という大きな条件を背景に、住民が互いに協力して守り続けてきた伝統的文化があり、今が弘前の建築文化・住文化を再検討する最後のチャンスであると訴えた。

研究報告1 松前からみた弘前

報告者は函館大学教授榎森進氏。榎森氏は蝦夷地（松前）と北奥羽（弘前）は津軽海峡で分断されているとはいえ、古来密接に関わってきたという史実から、相互の歴史を無視しては語れないとする。具体的には、①中世においては安藤氏、近世においては津軽氏が蝦夷地と密接な交流を行ったこと。

②特に津軽藩は、松前・南部両藩同様その成立当初からアイヌ民族との関わりを持ち、いわゆる北方の押えという位置づけをされていたこと。

③アイヌ民族が衰えると、代わって対外関係としての北方防備を命ぜられるが、津軽藩のそれは石高に比して負担が大きく、中心的役割を担わされていたこと。

④その結果、例えば寛政の藩政改革で実施された在宅（藩士土着）制度によって、弘前の町並み、特に武家屋敷地が大きく変化したこと。などを指摘し、アイヌ民族や松前・蝦夷地出兵という北方との関わりに、城下町弘前の歴史が大きく規定されていたと論じた。

研究報告2 溜池をめぐる近世都市論——弘前と南溜池——

報告者は弘前大学教授、同シンポジウム実行委員長谷川成一氏。長谷川氏は『弘前藩庁日記（国日記）』その他の史料の中から、慶長年間弘前城及び城下建築の一環として造られた南溜池の果たした機能、歴史的役割の変遷を藩政の成立期から崩壊期にわたって考証した。それによると、①建築当初、南溜池は人工的溜池として城下南側の防衛軍事施設であったこと。

②慶安二年の寺町大火後は、新しく成立した新寺町とともに大風・火災を防ぐ役割を持ったこと。

③江戸中期には藩主の憩いの場所という側面もあったが、後期から明治時代にかけては農業用水や都市民衆の憩いの地、または雨乞い祈禱の場や塵捨所など聖賤相合わせたさまざまな役割——本来の都市プランにはない自然発生的な役割——が生れたこと。

④さらに文化期以降の蝦夷地警備によって、南溜池は、家臣団の水練・弓術稽古場として改修され、再び軍事的施設として意識されたこと。

つまり、溜池という城下を構成する一つの建造物に、城下建設のプラン、藩政の動向、北方問題、都市民の生活や都市問題が照射されていることを論じている。

研究報告3 ヨーロッパ都市論から見た弘前

報告者は弘前大学教授高橋理氏。高橋氏は、日本史研究は他世界との比較により意義が一層明確になるとの観点から、日本とヨーロッパの都市の相違が本質的に大きいことを、原地の史料を駆使して実証した。具体的には、

①日本の都市は、古代ローマのように道路を中心とした都市建設ではなく、決して都市文明とは言えないこと。

②封建領主の支配下に置かれた日本近世都市と異なり、ヨーロッパでは有力商人が中心になって建設・運営され、一度得た自治権に領主は介入できなかったこと。

③弘前の長勝寺寺院街のように、寺を一ヶ所に集中させる権力があつて宗教がそれに従うようなことは、教会の伝統的権威の強いヨーロッパではあり得ないこと。

④さらに、実力をつけた都市民衆は、その教会の束縛にも反抗し自立していくが、この傾向は日本には見られないこと。

などである。しかし、今回の報告は都市建設のあり方を検討するために、主にヨーロッパ中世都市の問題を取り上げており、近世初頭に成立した弘前を考える場合、ではヨーロッパ近世都市の問題は何かという疑問を持った。

ところで、高橋氏は、このように都市をめぐる日本とヨーロッパの文化の違いを浮き彫りにしつつ、最後に、国際化といわれる時代にあたり、下手に伝統とか歴史にこだわらず切り捨てるべきものは思い切つて切り捨て、独自の都市文化を創造すべきだ、という刺激的な提言を行っていることは注目に値する。

研究報告4 雪国の都市としての弘前——住民の雪との関わりの変化——

報告者は弘前大学教授丹野正氏。丹野氏は雪国という条件が、弘前という都市の形成や発展に影響はなかったのかという発想から、主に明治以降の人口統計資料の数量的分析を通して、次の点を明らかにした。

①城下町弘前の形成は、雪（処理）問題を意識したものとは言えないこと。

②東北地方の中では青森と岩手が、寒さと雪のためか特に耕地面積当たりの人口密度が低かったこと。

③しかし、降雪の有無に関係なく全国的に進む人口流出と老年化・過疎化現象の中で、青森だけは逆に人口が増加していること。それは農業面の技術進歩のほか、北海道・北洋という北への視点があつたためであろうこと。

④北洋が衰退している今、青森は再び「雪国」と「地方」という二重のハンディに当面していること。

そして、今後も北への視点をもちつつ、それぞれの地域性をふまえた都市づくりの必要性を説いた。ただ、今回の報告では、人口統計資料の分

析に終始したため、傾向はつかめても雪国の都市問題の内面に迫り切れていない感があった。

三

さて今回のシンポジウム、ひいては本書の意義は何であろうか。筆者は今回のシンポジウムが、最近の日本史学が指向する三つの座標軸の交点上に成立した大きな成果であつたろうと考える。その三つの座標軸とは、一つが都市研究の座標、もう一つが学際的研究の座標、そして残る一つが北からの日本史という座標である。

戦後、農村の社会経済史的研究から再出発した日本史学は、一九七〇年代に入り都市の問題に急速に注目が集まり、多くの成果を蓄積してきた。弘前については、筆者が本誌第七十六号⁷⁶で、さらに、井上雅彦氏が第八十一号⁸¹で指摘したように、その研究の遅れが叫ばれてきた。しかしここ数年、地名辞典や町方史料、絵図などの史資料が相次いで刊行され、年々充実してきていることは周知の通りである。今回のシンポジウムにはこれらの成果も盛り込まれており、市制百周年の事業としては文化都市弘前ならではの企画といえよう。

次の学際的研究については、最近社会の多様化に伴い、今までの学問分野では対応しきれない問題が多くなり、いくつかの学問領域にまたがった研究がなされているところである。本県についても『北奥地域史の研究』『総合研究 津軽十三湖』¹³などの実績がすでにあり、いわゆる歴史学以外の学問とも協力して、共通の問題意識の下、多角的に一つのテー

マを掘り下げていく手法がとられている。今回のシンポジウムでも当然この手法が採用され、基調講演では建築という弘前のハード面から、また榎森・高橋両報告は蝦夷地・ヨーロッパという弘前の外からの視点、長谷川・丹野両報告は溜池・雪という弘前の中からの視点からそれぞれその本質に迫ろうとしているのである。

最後の北からの日本史に関しては、言うまでもなく今回のシンポジウムが、一昨年の弘前シンポジウム「北からの日本史——地域・民族・国家——」の成果を踏まえている点をさしているが、今回も榎森・長谷川・丹野各報告において「北からの視点」が強調されていた。中曾根元首相の単一民族国家発言以来、アイヌ民族は一時的に注目されるようになったが、津軽や南部で滅んだアイヌ民族は、今まさに北海道においても消滅しかかっているわけで、この点アイヌ民族と津軽・弘前が密接に関わっていたという榎森報告は重要であろう。また、青森の人口増加は北海道・北洋をひかえた本県の特殊性であろうと論じた丹野報告も興味深い点があるが、「青森県が特別に行政レベルの挺入れを受けているとも思えません」という発言は、本県が、戦後一貫して国の巨大開発プロジェクト（むつ小川原・六ヶ所村核燃・原子力船母港など）を受け入れる中央直結の政策を取ってきたことを踏まえてのものかどうか、疑問の残るところである。

四

次に今後の課題について述べておきたい。今回のシンポジウムの討論

の中から浮び上ってきた問題点は、都市研究をいかに進めていくかということと、町並みをどのように保存していけばよいかということの二点であろう。

まず第一の都市研究については、長谷川氏も自ら述べているように、長勝寺構や弘前総構など、近世都市の「構」の構造を解明することはもちろんであるが、何よりも弘前都市民衆がいかに生活していたかを論証する必要がある。この点、今回の報告でも弘前の住民を正面から取り上げたものがなかったのは残念であった。長谷川報告には、南溜池での雨乞い祈禱が都市民衆のエネルギー発散の場ではなかったかという指摘があり、弘前に打ちこわしがなかったことと結びつけられているが、この点については、弘前に対する税負担の構造や町方支配機構、住民構成の問題ともからめて検討されていくべき問題と思う。

第二の町並み保存の問題については、高橋報告のように、むやみに伝統にとらわれない思い切った都市づくりをという提言もあったわけであるが、この提言を、いたずらに古いものにとらわれず、ヨーロッパでも従来の日本でもない新しい弘前の発展を期待したと考えるならば、筆者も共感するところ大であるが、一方で、住民が「こみせ」や「妻入」住宅を守ってきたという玉井報告、「弘前は金沢のように兵営などの近代的施設を史跡に入れなかった」という荒井清明氏の発言、さらには現在の弘前市の町名の多くは慶安期の「弘前古御絵図」に既に見られるという長谷川氏の指摘などに接する時、過去民衆が意識の有無に関わらず守ってきた伝統的町並みを未来に残していくこともまた、現在を生きる私たちの使命なのだと思われない。

そこで問題は、伝統的町並みを残す方策になるわけだが、問題提起にも述べられているように、「街角に人が見掛けられない建物群」は真の保存とはいえないのであって、当然そこで生活している人がいる以上、まったく固定した現状維持での保存は不可能になる。つまり町並み保存は、文化財を復元し現状のまま凍結保存する文化財保護とは本質的に異なるのだといわれている。すなわち町並み保存は、広く都市計画の一環として考えられるべきであって、行政・住民・研究者が一体となって行うべきものであろう。実は、筆者が冒頭に述べた、「日本史学は実学たり得るか」という疑問への回答がここにあるのである。

最後に、講演・報告なさった先生方に非礼をお詫びするとともに、弘前が今後も観光立市をめざすならなおのこと、最近流行のファッションビルや高層マンションの林立する小東京的都市ではなく、古い伝統と新しい可能性を秘めた個性ある都市を創造して欲しいと、青春時代を弘前で過ごさせていただいた一人として切に願うものである。

註

- (1) 拙稿「書評 高島成侑・三浦忠司著『南部八戸の城下町』」(『弘前大学國史研究』第七十六号)
- (2) 井上雅彦「書評と紹介 長谷川成一編『津軽近世史料1 弘前城下史料 上』」(『弘前大学國史研究』第八十一号)
- (3) 『日本歴史地名大系2 青森県の地名』(平凡社 昭和五十七年)、
『角川日本地名大辞典2 青森県』(角川書店 昭和六十年)、長谷川成一編『津軽近世史料1・2 弘前城下史料 上・下』(北方新社)

昭和六十一年)、『絵図に見る弘前の町のうつりかわり』(弘前市立博物館 昭和五十九年) などがある。

(4) 長谷川成一編『北奥地域史の研究』(名著出版 昭和六十三年)、佐々木孝二編『総合研究 津軽十三湖』(北方新社 昭和六十三年)

(5) 長谷川成一「弘前城下について」(前掲註3『津軽近世史料1 弘前城下史料 上』所収)

(6) 太田博太郎「歴史的風土保存の現段階―町並み保存を中心として―」(『日本の都市と町―その歴史と現状』雄山閣 昭和五十七年 所収)

(名著出版 平成二年刊 A五判 一八七頁 定価一四八〇円)

(岩手県立花巻南高等学校教諭)